

令和5年度 初任者研修及び新規採用教職員研修 開講式
教育長挨拶

令和5年4月4日（火） 13時30分
大宮国際中等教育学校グローバルホール

皆さん、こんにちは。教育長の細田でございます。

昨日辞令交付をさせていただき、その後、皆さんはそれぞれの学校へ着任されました。さいたま市の教職員として、新たな一歩を踏み出した皆さんを、各学校は、大切な仲間として温かく迎えられたことと存じます。

さて、いよいよ子どもたちとの生き生きとした生活が始まります。

心身ともに成長が著しい子どもたちは、日々変わります。学習面でも生活面でも、できなかつたことができるようになったときに見せる表情は何とも言えません。どの児童生徒も、喜びに満ちた、本当に良い顔をするんです。

また、以前は取り組むことを躊躇していた子どもが積極的にチャレンジするようになったり、周囲の気持ちを考えて譲ったり我慢したりできるようになる姿も、その児童生徒の内面の成長を感じてうれしくてたまりません。

このように、人が成長していく姿を間近で見守ることができることこそ、教員の最大のやりがいだといえます。

また、学校生活の山場である、体育祭、文化祭、合唱コンクールなどといった行事はクラス単位で活動するため、行事を終えるころには深い絆が生まれます。一人ひとりの心を重ねて、団結するまでには子どもたち同士の衝突があったり、準備・練習が思うように進まなかつたりと苦労しますが、その分、みんなで乗り越えたという実感は、何度経験しても心を動かされます。「やった」「がんばった」という満足感・達成感と、仲間意識を子どもたちと共感できる点は、まさに教師の醍醐味です。

今、私の話を聞いてくださっている皆さんの表情や姿からは、これからの教職員生活に対する熱意や希望が伝わってきます。いよいよ、ですね！

さて、「チームさいたま市」の一員となり、本日から一年間の研修に取り組む皆さんへ、私から大切にさせていただきたい言葉を贈ります。

それは、フランスの詩人であるルイ・アラゴンの詩「ストラスブール大学の歌」より「教えるとは希望を語ること 学ぶとは誠実を胸に刻むこと」という一節です。

第二次大戦中、フランスはナチスドイツに侵略され、ドイツ国境に近いストラスブール大学は、ナチスの弾圧と戦火から逃れるために中央フランスのクレルモンという街に避難しました。しかし、1943年、ナチスによって大学の教授、学生が銃殺され、数百人が逮捕されるという惨事が起きました。そして、大学だけではなく、教育そのものが危機に瀕する中、詠まれたのが、この「ストラスブール大学の歌」です。

苦難の中でこそ、「希望を語ること」、つまり「教える」ことが必要となるのであり、そして苦難を乗り越え、次の時代を作っていくために、「誠実を胸に刻むこと」、つまり「学ぶ」ことが必要になってくるのだと考えます。

ウクライナでの戦火を目の当たりにし、分断される世界の中で、教育に何ができるのかを考えると、この言葉を想起せずにはられません。

この『ストラスブールの歌』の「教えるとは…」の後には次のような言葉があります。

古今の学に通じた教授たち
審判者（さばくもの）のまなざしをもった若者たち
君たちはそのかくれ家で
大洪水の明けの日にそなえた
再びストラスブールに帰る日に

ウクライナでの出来事が、遠い国の出来事ではありません。私たちも、三年前、新型コロナウイルスから子供を守るために三か月学校を閉じることを余儀なくされました。

身を固くし、口を閉じ、ひたすら子どもの安全を守るために耐えてきました。私は、三か月の休校の後、学校に戻ってきた子どもたちのマスク越しの笑顔を忘れることができません。

私たち教師は、どんな困難な時も、子どもたちに希望を語り続けていかなければなりません。そして、子どもたち一人ひとりの明日のために、学ぶことのすばらしさを、わたくしたち自身が身をもって示していかなければならないと強く思いました。

さいたま市立学校の教師となった皆さんは、子どもたちを導き、育てるといふ、崇

高な職責を担うこととなります。これからの長い教員生活の中で、たとえ苦難や困難に遭遇しても、初心を忘れることなく、それぞれの立場で、その力を存分に発揮されることを期待しております。

子どもたちへの指導等に悩むことがあっても、決して自分ひとりで抱え込まないでください。隣の仲間や、懸命に努力を重ねている諸先輩方がいることを忘れないでいただきたいと思います。

結びに、御多用の中、御出席いただきました 三島 公夫（みしま きみお）さいたま市立小学校校長会会長並びに 溝口 景子（みぞぐち けいこ）さいたま市PTA協議会会長に御礼を申し上げ、私の挨拶といたします。